特別寄稿

日向纂記と山田匡徳

日田市　髙倉芳男

平部嶠南は飫肥藩の大参事であり、大儒安井息軒の高足でもあるが、歴史家としても日向私史・日向纂記の遺著がある。殊に日向纂記は、飫肥藩主伊東氏を中心とした史書で、筆者が三十年前飫肥高女・中学在職中に、生徒に郷土史を指導するために通読した本である。

本春、佐伯史談八十六号の寄贈をうけて、「その後の山田土佐入道」の研究を拝見して、懐旧の情にたえず、日向纂記等から山田匡徳に関係する箇所を補記することにした。

御参考になれば幸いである。

山田匡徳は、永禄元年（一五五八）に十七才の初陣（日向纂記十）とあるから、天文十一年（一五四二）の生まれということになる。

次に、匡徳の頃は、伊東氏が最も島津氏との攻防の激烈な頃であり、匡徳は島津との攻防戦に武名を挙げたのであるから、伊東・島津の攻防からのべると、

伊東三位入道義祐は、島津の所領飫肥を攻略しようとして、天文十年（一五四一）に軍議をひらき、宮崎の城を出馬した。

天文十四年―同二年、飫肥の近くの鬼ヶ城に築城して、多くの軍勢を送って飫肥城を脅かした。

その結果、飫肥城周辺の島津方の支城は次々に落ちて、永禄元年新山城（旧飫肥中学の前の丘、飫肥の本城から二粁弱）の戦で、山田二郎三郎（後に土佐守とも云い、大江匡房の兵学を学んだというので匡得と号す）は、島津の猛将島津豊前を打ちとって

「コレヨリシテ二郎三郎ヲ鬼神ノ如シ」

と怖れられた。

永禄五年、飫肥は島津氏に奪還された。

永禄七年、伊東義祐は飫肥攻略のため、また鬼ヶ城に出陣した。この攻略戦のうちに永禄十年に、耳田の砦で匡得の父山田備前守は、島津方の大将和田民部少輔に討ちとられた。

然し、伊東氏の攻撃はつづけられて、永禄十一年二月の小越合戦で

「山田二郎三郎ハ、勝岡城主和田民部少輔ヲ討取シガ、亡父備前守ガ仇和田民部少輔ヲ、山田二郎三郎打取タリ。是見ラレヨ人々ト、大音揚ゲテ呼バハリケル……民部少輔ガ子、助六年十八ナルガ、父ノ討タレタルヲ見テ、駆入ツテ死セントス、郎党一人鎧ノ袖ニスガイ、是非命ヲ全フシテ亡父ノ遺迹ヲ立ラレヨト制スレドモ、今此時ニ臨ミ誰カ一人逃ルベキトテ、二郎三郎ニ斬ツテ懸ル、二郎三郎スカサズ取テ押ヘケルガ、其年少フシテ志ノ勇ナルニ感ジテ、

其ママ縋シテ帰シケル、長倉次郎右衛門尉之ヲミテ、後ヨリ追カケテ、情ナクモ其首ヲ打落シケレバ、二郎三郎ガ情ハ、古ヘ熊谷ガ敦盛ヲ助ケシニモ劣ラネドモ、次郎右衛門ガ挙動ハ浅間シカリケル事ナリト（人々）サミシケル……。」

こうして、永禄十一年六月に飯肥は再び伊東氏の手に入ったが、伊東と島津の抗争はつづいて

元亀三年（一五七二）五月、飯野川で伊東方は大敗北を喫し、義祐は大友宗麟を頼って豊後に奔った。

天正六年（一五七八）大友宗麟が日向に出兵すると、

匡得は石の城にたてこもって、島津勢の北進を阻もうとした。

「薩摩勢雪霞ノ如ク寄セ来リ、無二無三ニ攻登ル……兼テ斯ク有ルベシト期シタルコト故、少シモ恐レズ山田土佐守大刀始メシテ諸勢ヲ励ミシ戦ヒケレバ、攻手大勢ナリト雖モ攻アグンデ……味方ノ勢少シモ屈セズ、三日三夜防戦ス、山田土佐守ハ飯野ノ城主（島津方）伊集院元巣ト槍ナ合セ、元巣ノ右ノ股ニ衝キアテ、比類ナキ働キシテ……。」

結局小勢ではあり、兵糧も乏しく、後詰もないので城をすてて引き去った。

ついで宗麟自ら出馬して耳川の戦で、大友氏の大敗、義祐は漂泊のうちに死し、その子祐兵は秀吉に従って戦功があり、天正十五年日向国に所領を賜わったが、特に飯肥の地を願って、飯肥付近を賜わることになり、翌十六年閏五月三日、飯肥城に入ることが出来た。

豊後の佐伯惟定のもとにいて日向境で、島津家久の軍を破った匡得も、

「報恩公（祐兵）飯肥拝領アリケレバ、山田匡得ハ早速豊後ヨリ帰参セリ」

とあるように、伊東氏に帰参した。

初度の征韓の役で、文禄元年（一五九二）の三月二日に、伊東祐兵は七三〇の兵をひきいて飯肥を出馬しているが、その中に「山田土佐入道匡得」の名が見える。

慶長五年関ヶ原の役に、祐兵は家康に味方して、軍を率いて東上しようとしたが、周囲の島津・秋月・高橋等が、皆石田三成に味方しているので、多くの留守居の大将と兵を残して諸城を守らせ、自身は数百の兵をひきいて東上した。

その留守居の将の中に、山田匡得の名が見える。この時に匡得は五十九才であった。（おわり）

（余白に）

佐土原領内総家数（享保十五年写 戸倉家古書（秋山家蔵））

三百六拾六軒　家中
百八拾弐軒　両所諸商人
五千三百七拾弐軒　在浦百姓
三拾九軒　寺社山伏
六軒　牢人

合　五千九百六拾五軒